

神 様

牧 里美

神様のいる場所はきっとたくさんある。私を救ってくれるものもちゃんとそこにある。しばらく海は見られないけど、違ったものが私を待っている。「さあ、行こう」
私は荷台から飛び降りた。

この本は、こう締めくくられている。読み終わって、私は、なんて心が温まる本なのだと感じた。それは、日常的なやりとりが描かれているこの作品のタイトルの、図書館の「神様」という少し日常から離れた表現が、おもしろいけれど、妙に納得して、すごく心地の良いものだったからだと思う。

主人公は、高校国語講師の清。彼女は、いつも正しくあることに重きをおいて人生を生きてきた。何事もまじめにまっすぐやればいい。そのルールに従うだけだから、人生は簡単だと思っていた。ある出来事が起こった時、清の、その清く正しいと思いついていた人生がひっくりがえってしまう。清は、小学校からずっとバレーボールに力を注いでいた。常に向上を目指した清は、強いプレイヤーになり、高校の時にキャプテンとなった。そして、ある練習試合で、補欠の山本さんを投入したことが原因で、なんでもない試合に負けてしまった。バレーに関して厳しい清は、反省会で山本さんを泣かせてしまった。清は、間違ったことをしたわけではないと思い、あまり気にかけてはいなかったのだろう。しかし、次の日、山本さんが自殺したという悲報が飛び込む。清は、反省会のことが脳裏によぎりながらも、そんなことで死ぬ人間がいるわけないと思っていた。しかし、周りみんな、清を責め、真実がどうあれ、清は罪悪感や非難の目に耐えられず、バレーボールから離れていった。バレーボールがすべてだった清にとって、これは、人生の転機となる。その後、清は、次第に清さや正しさが薄れ、投げやりになっていった。

清は、地元から逃げるように、田舎の大学に進学した。清さを失ったことと人の愛に飢えていたことが理由なのか、妻子ある男性との関係も断ち

切れずにいた。こんな境遇にある清が、文学部だっただけの理由で、高校の国語講師になり、海の側にある高校で、部員がたった一人の文芸部の顧問として過ごす日常生活を描いた作品である。

バレー部の顧問になりたかった清にとって、図書館で静かに活動する文芸部はつまらないものでしかなかった。部員は、3年生の垣内君である。垣内君は、中学時代にサッカー部キャプテンの経験があり、清は、なぜ彼が文芸部にいるかが謎だった。バレー部などのスポーツと違って目指すものもなく、メリハリがない。こんな清の言葉に対する垣内君の答えはこうだ。

「毎日筋トレして、走りこんで、パスして、後は、レシーブ練習サーブ練習などなど。バレー部の方が毎日同じことの繰り返しじゃないですか。文芸部は、何一つ同じことをしていない。僕は毎日違う言葉をはぐくんでいる。」

私は、これを聞いて、清と同じく、どきっとした。そして、すごく嬉しくなった。こんなことをさりとて言う高校生は日本にいるのだろうか。私も、本は大好きで、昔からとにかく読み漁っていた。しかし、年齢が上がると、だんだん遠ざかってしまっていたが、改めて、文学の素晴らしさを垣内君に教えてもらった。一つ垣内君に反論するならば、スポーツも毎日同じことの繰り返しの中に、少しずつ、前とは違う部分を見つけることができ、それが強さにつながっていくのだ、と伝えたい。

垣内君は、清の性格のちょっとした特徴や欠点を見つけ、素直に伝えるシーンがいくつかある。でも、生意気なわけではなく、清が自分で気づいていなかったことを、教えてくれるといった感じだ。

「先生はそういう行き当たりばったりな性分じゃない気がするんですが。」

「何か間違ったことを言ってる？って、そんな堅苦しいことを言ってるから頭痛になるのですよ。そうやって、正しさをアピールすると、体力を消耗しますよ。」

この、垣内君は、あまり感情的にならず物事を

冷静に見るクールな少年だが、それなりに悩みもあった。垣内君は、キャプテンだったサッカー部で、ある部員が練習中に倒れて入院したことがあった。そのことは、垣内君のせいではないのに、垣内君は責任を感じ、それ以来、誰かの怪我や病気に敏感になった。垣内君は、こんな風に言う。

「見た目に健康状態が分かりやすい人はいいかもしれない。僕は相手の内面を読み取る能力が低いので、そうやってアピールしてもらえると助かります。」

本人の中では、ちょっとした悩みでもあり、ネガティブな考え。だけど、相手に目を向けようとしている垣内君の優しさがすごく心地よい。そんなちょっと照れくさいと感じるようなセリフを清に整然と話す姿が、すごくカッコいいと思う。

垣内君の詩にもそんな優しさがにじみ出ている。

雑草は、強いと言いますが、どうしてでしょう。彼らだって弱い部分があるはずです。

「踏んでもすぐに立ち直る」

「愛情をかけなくても強く生き抜く」

かわいそうです。

見てもらえません。

聞いてもらえません。

僕は彼らの弱い心を見つけれられるそんな大人になりたいです。

これは、清にとって、すごく嬉しい詩だったのではないかと思う。強く、正しく生きることから逃げた自分。でも、そんな弱さを許してくれるかのように、垣内君の詩は優しいものだっただろう。また、清に対する態度や言葉の節々に、優しさがある。垣内君に会ってみたいと思うほどだ。

清のちょっとふざけた言葉や疑問にもきちんと答える、垣内君の真面目さと優しさが入り混じった言葉が、とても多い。川端康成の小説では、少し意外な場面で主人公が鼻血を出すシーンがある。面白さを感じ、流行っていたのかなあ、という清の少しおどけた言葉に垣内君はこう答える。

「さあ。神妙な気持ちの時は鼻血が出るものじゃないですか。」

そして、ピーナッツを食べている時も鼻血が出るが、あれも神妙な気持ちなのか、などと、互いの考えることを冗談も交えながら話し合い、部活動をしていく。垣内君の、文学好きについていけなさを感じていた清も、だんだんと文学のおもしろさにはまっていく。二人のやりとりは、なぜか、

見ていて楽しい。清の少し気持ちの抜けたような発想や言葉。だけど、おもしろい着眼点。それに対して、垣内君が文学少年らしい真面目な、だけど素直な思いを投げかける。二人は、すごく真面目で、かたい人間に見えていたけれど、実はお互いに、自分の素直な気持ちを出し合っていて、ぶつかり合うこともなく、すごく妙にフィットしている。現実的で平和な日常が描かれている。そこがこの二人のやりとりの面白さだと思う。

また、垣内君は、相手をまっすぐに受け止めようとする態度がとてもある少年だ。清へ優しさを見せるのは垣内君だけではなく、清の弟や清が受け持つ生徒もいる。しかし、清が、昔の傷を癒す過程で、この垣内君の優しさは一番なくてはならないものだったと私は思う。

山本さんの死をきっかけに失っていた、自分らしさと、自分がしたいこと。ずっと抱えていた、山本さんへの問い。「私のせいなの?」「どうして死んだの?」「許してくれているの?」

逃げていたもの、乗り越えたくてもきっかけがなかったもの。しかし、その傷を癒し、乗り越えるためのきっかけは、日常の中の些細な気付きや優しさの中にあり、清はそれを自然に体で感じながら、改めて、自分の在り方を見つめていくのだ。そんなことを、この作品を通して感じた。

文芸部活動最後の日、垣内君は清に、スポーツはしないのか、どうして文芸部にいるかを尋ねる。文芸部に初めて来た日、なんで彼は文芸部にいて、なんで自分は文芸部の顧問なのだろうと思っていた清は、逆の質問をされる。最初、バレー部の顧問になれなかったことに不満を抱き、文芸部に良いイメージがなかった清は、ふと考える。そして、自分がここにいることには、ちゃんと理由があったと気付く。そして、垣内君の提案で二人はグラウンドを自由に走り回る。一年間、図書室で一緒に過ごしてきた二人が、冬の寒さをものともせずにかいっぱい、気が済むまで、好き勝手に走り回る。目的もなく、だけど意味はあったのだと思う。この後、垣内君が、密かに買っていたサイダーを二人で飲み、二度とできないね、と言いながら、活動を終える。このシーンの爽やかさはものすごい。読んでいてこちらまで走りたくなる。清は、ずっと忘れていた青春を、垣内君と共に味わっていたのだろう。そして、今までの苦労や辛い思いを、ぬぐいきるかのように走っているようにも思えた。

最後の章、垣内君は卒業し、清は講師から教師になり新しい勤務先の学校がある地元へ戻る日、清は手紙を三通受け取る。一つは、不倫していた相手からの、応援の手紙。そして、垣内君からの応援の手紙。おいしい所をちゃんと持っていく垣内君の手紙の内容はこうだ。

先生が先生になるなんて、喜ばしく思います。先生の明日と明後日がいい天気であることを祈っています。

最後まで、おい垣内君！と思わずつつこみたくなるほど、おいしい所を持っていき、おいしい言葉を残してくれる少年だ。

そして、三通目は、山本さんのお母さんからの手紙だった。清は、毎月、山本さんのお墓に行っていた。ずっと、山本さんへの問いが離れず、葛藤の中にいた清も、この手紙で最後の傷がとれたのかもしれない。

神様のいる場所はきっとたくさんある。

これは、自分の解釈でしかないが、神様について考えてみた。

清は、過去から逃げたい気持ちを持ちながらも、忘れられない過去に葛藤を覚えながら、日常を流れるように過ごす。しかし、その中で、今まで気付かなかったことや、人の優しさに触れながら、改めて自分を見つめなおす。そして、自分以外の

世界に触れる方法は、教師を続けることだ、と確信する。

神様は、試練を与えると共に、ちゃんと、自分にとって必要なものを与えてくれている。過去への葛藤、高校の講師になること、文芸部の顧問になり垣内君に出会うこと、最後の日に三通の手紙を受け取ること。投げやりになっていた清が、この一年間を通して、どこかに神様はいてくれるのだということに気付いたのだと思う。現実にはちゃんと意味があり、必然の中を私たちは生きているのかな、と感じた。

高三にしては、少しおいすぎる少年が約一名いるが、現実でありそうな生活を描き、そのちょっとしたできごとを神様とつなげる所が、私はすごく好きだった。

「先生のそういうところ、僕は素敵だと思います」

「へ？」

「国語教師としてセンスがあるって思う」

「何それ」

「さあ」

一番気に入った会話だ。こんな生徒に出会ってみたいと思う。

『図書館の神様』瀬尾まいこ著、マガジンハウス、2003

(まきさとみ・札幌校3年)